

# C. L. R. ジェームズによるアメリカの身体論

梶原克教

## はじめに

本論文は、二つの不在に端を発する。ひとつは米国のハーレム・ルネサンス期における運動する身体の不在であり、もうひとつは C. L. R. ジェームズ (Cyril Lionel Robert James) 研究における身体論の不在である。そして、その両者を結びつけているのは、人種化される身体という問題系である。

運動する身体はしばしば人種化されてきた。たとえば、「黒人の身体能力は生まれつき優れている」だとか「黒人は水泳が苦手」などという言説はその代表だろう。いうまでもなく、それらは歴史的なものであり、たとえば1920年代から30年代にアフリカ系アメリカ人たちがはじめて自分たちを文化的に定義づけ発信し始めた、米国のハーレム・ルネサンスにおいて、その身体性が強く押し出されることはなかった。同時期は「スポーツの黄金時代」と呼ばれ (Aberjhani and West 315)、人種を問わずプロ・スポーツが絶大な人気を獲得していった時代だっただけに、スポーツに関する沈黙、もしくは運動する身体にまつわる言説の不在がいつそう際立つ。

C. L. R. ジェームズは、その影響力に比して研究対象となる機会の少ない存在である。とりわけ日米ではその傾向が強い<sup>1)</sup>。エドワード・サイード (Edward Said) が『文化と帝国主義』 (*Culture and Imperialism*) で頻繁に言及し称賛していたにもかかわらず、マルクシズム研究の一環としてその政治思想が扱われることはあっても、ジェームズによるスポーツ・ライティングや映画論を結びつけた文化研究はいまだに限定的である。英国のカルチュラル・スタディーズの文脈で、スチュアート・ホール (Stuart Hall) への影響や、ホールやポール・ギルロイ (Paul Gilroy) が言及したり引用したりすることはあるものの、それがジェームズの文化論を具体的に解明することはない。それはひとつに、彼の著作の位置づけが困難であることに起因するのかもしれない。というのも、地理的な意味に限らず、執筆および講演をおこなった分野においても、その活動が多方向へ拡散し

ているからである。それを指してキャリル・フィリップス (Caryl Phillips) はこういつている。

The difficulty with C. L. R. James has always been location, both in the literal sense (his life being a testament to compulsive itinerancy), and in terms of the many categories under which he is acknowledged to have achieved. He broke ground in the fields of literature, literary criticism, cultural studies, political theory, history and philosophy, and in more than one of these areas he can be looked upon as a pioneer. (2155)

とりわけ際立つ不在は、主著のひとつともされている『境界を越えて』(*Beyond a Boundary*) に関する研究だろう。同書は自伝、競技描写、植民地と宗主国との歴史記述、さらに芸術論などからなる混淆体であり、ペダンティックな記述から百科全書的な知識の披瀝をも含み様々なジャンルを横断している点において、ノースロップ・フライ (Northrop Frye) がいう「アナトミー」とみなすこともできるが、それがやはり論じにくさの原因となっている。また、同書出版以前に滞在していた米国でも、さらに英国での経験を記した『境界を越えて』以降も、ジェームズはスポーツに関する論考をほとんど残していない。

そこで本論文では、ジェームズの多岐にわたる著作活動の全体を俯瞰したのちに、彼の人種的アイデンティティに関する考察とその歴史化について追った後に、彼が米国滞在中に残した著作のうち、現在なら「身体論」と呼ばれる領域に相当する内容のものについて考察し、それが『境界を越えて』という英国におけるクリケット論と並ぶ米国における「身体論」を形成していることを立証する。

## 移動の生涯

はじめに、ジェームズの生涯について時系列で振り返りながら、その位置取りの多様さを概観してみたい<sup>2)</sup>。ジェームズは1901年に英国植民地下のトリニダード島で学校教師だった父親と読書家の母親の間に生まれた。スチュアート・ホールによれば、カリブでは裕福な階級であっても読書の伝統を持たない家庭が珍しくないにもかかわらず、中流のなかでも下のほ

うの層に生まれたジェームズが勤勉な読書家になったのは、この母親の影響だと言われている (Hall 3-4)。1910年に奨学金を得て、当時のカリブ最大の公立男子校 (secondary school) のひとつクィーンズ・ロイヤル・カレッジに入学し、英国流の教育を受け、1918年に卒業した。その後、教師をしながら作家を目指すことになるが、その時期の教え子の中にはのちにトリニダード独立運動のリーダーとなり、独立後初代首相となったエリック・ウィリアムズ (Eric Williams) も含まれる。ウィリアムズのオクスフォード大学博士論文で、1944年に出版された『資本主義と奴隷制』 (*Capitalism and Slavery*) のアイデアも、ジェームズから与えられたものと言われている。その作家修行時代の1920年代に、ジェームズは次第にトリニダードの労働運動や独立運動に深く関わるようになっていった。

1932年に英国に渡り、クリケット選手リアリー・コンスタンティン (Learie Constantine) に出会い、その邂逅が現在のスポーツ・ライティングの嚆矢とも呼ばれる越境的文化論『境界を越えて』につながることになる。コンスタンティンは西インドチームの選手でありながら、英国のリーグと初めて契約した黒人選手で、ジェームズはコンスタンティンの紹介で『マンチェスター・ガーディアンズ』 (*Manchester Guardians*) のクリケット記者となった。1936年にはトリニダードの生活を自伝的に描いた小説『ミンティ・アリー』 (*Minty Alley*) を、1938年には『境界を越えて』と並びジェームズの主著とされる『ブラック・ジャコバン』 (*The Black Jacobins: Toussaint L'Ouverture and the San Domingo Revolution*) を出版した。後者はハイチ革命を描き出すと同時に、革命の指導者トゥサン・ルベルチュール (Toussaint L'Ouverture) が、「ボナパルティズム」のあやまちからデサリーヌ (Jean-Jacques Dessalines) に取って代われ、続いてデサリーヌが官僚制にとらわれてゆくさまを、スターリン主義化に帰結したロシア革命と重ね合わせるものでもあり、同時代の政治・社会を射程に入れた歴史書だった。

同じく1938年に米国へ渡り、当初は短い滞在の予定が、1953年までの長期にわたり居住することになる。その間に、旧世界とは根本的に異なる新しい社会としての米国に関して、外国人の視点で見たトックヴィル的な考察を加えると同時に、本稿のテーマのひとつともなるポピュラー・カルチャーに関する考察を重ねていった。1953年にビザの問題でエリス島に拘束され、出所のために『水夫、反逆者、漂流者』 (*Mariners, Renegades*

and *Castaways*) というメルヴィル論を出版するが受け入れられず、翌54年に英国に戻る事となった。本論との関係でいうなら、このメルヴィル論は『白鯨』を米国のポピュラー・カルチャー前夜の作品として、映画監督・俳優であるチャールズ・チャップリン (Charles Chaplin) の映画などの文脈に置くものでもあった。

その後は英国とトリニダードを行き来していたが、1958年に先述の元教えずでありトリニダード・トバゴ共和国の初代首相となるエリック・ウィリアムズに招聘されてトリニダード島に戻り、独立運動の一環として発行されたウィリアムズの党機関誌『ネイション』(*The Nation*) を編集することになる。しかし、米国軍へのシャグアラマス軍事基地使用期限などの諸問題でウィリアムズと仲違いし、1962年のトリニダード共和国独立前夜に再び英国へ渡ることになった。1963年には先述の名著『境界を越えて』を英国で出版。1965年にクリケット記者としてトリニダードにふたたび戻るものの、自宅軟禁されたためにトリニダードを離れカナダに移って、トロントの若い知識人たちと交流をおこなった。1968年に米国に再入国し、その後は各地で講演活動をおこなったり、ワシントン DC の Federal City College で教鞭を執ったりした。

1981年にはロンドンのブリクストンに移り、のちにダブ・ポエットとしてレゲエ界のみならず文学界でも注目を浴びることになるリントン・クエシ・ジョンソン (Linton Kwesi Johnson) らが共同経営する英国の黒人向け政治誌『レイス・トゥデイ』(*Race Today*) の編集部に関わりし、ジョンソンをはじめとする若い世代に影響を与えた。上述の小説家キャリル・フィリップスも、そのなかの一人である。1986年にはトリニダード・トバゴでもっとも名誉ある勲章 Trinity Cross を授与され、1989年にロンドンのブリクストンで生涯を終えた。

さて、こうした略史からもわかるとおり、ジェームズはトリニダードの独立運動に深く関与し、それに加えて米国でのパン・アフリカニズム運動にも関わっていたわけだが、フィリップスもいっているように、人種を理由にイギリス連隊への入隊を拒否された経験を持っていたにもかかわらず、人種問題を加害者・被害者の関係で一面的にとらえる取り組みには、生涯関心を示さなかった。

In a later passage he reflects upon being denied admission on racial grounds

to the local English regiment, but claims that this incident left him unscarred. James's lifelong lack of interest in addressing questions of race in a one-dimensional manner was owed to his Caribbean upbringing. (2184–2186)

こうした人種的アイデンティティの相対化を身体観へと結びつけるのが本論文の主たる目的であるが、それと並行して、ジェームズがそこから導き出したポピュラー・カルチャーの持つ可能性の問題全般についても追ってみたい。

### 人種と歴史と階級

英国植民地トリニダードで生まれ、英国とトリニダードの両地で植民地主義的環境を十全に経験し、1960年代のカリブ諸国独立の時期以降に英国帝国主義を巧妙に引き継いだ米国が中南米にあらたな帝国主義的ヘゲモニーを確立してゆくのを目の当たりにしていたジェームズではあったが、脱植民地主義闘争やパン・アフリカニズム運動にしばしば見られる「植民者」対「被植民者」であるとか「白人」対「黒人」であるといった、アイデンティティに即した議論を避ける傾向にあったのも確かだ。エドワード・サイードは、「ナショナリズムには、権威主義的・国粹主義的思想の力を極力抑えようとする考えがあり、そのためにアイデンティティ・ポリティクスの強制的性格を厳しく批判する」のだと指摘したうえで、ジェームズをその典型として次のように描いている。

An attentive reading of towering figures within the nationalist ranks—writers like C. L. R. James, Neruda, Tagore himself, Fanon, Cabral, and others—discriminates among the various forces vying for ascendancy within the anti-imperialist, nationalist camp. James is a perfect case in point. Long a champion of Black nationalism, he always tempered his advocacy with disclaimers and reminders that assertions of ethnic particularity were not enough. (219)

このようにジェームズはブラック・ナショナリストとして急先鋒である一方で、人種的・民族的特異性を主張するだけでは不十分であると、絶えず

主張してきたのだった。彼がそう考えたのは、人種問題と同時に階級問題についての意識を強く持っていたからである。そうしたジェームズの複雑なスタンスについて、スチュワート・ホールは次のように描写している。

Although James did not want to privilege the black struggle, he did not think Trotskyism or any other Marxist movements, which often made the factor of race too incidental, were correct. James felt that questions of race were subsidiary to questions of class and politics and that to think of imperialism in terms of race is disastrous. But he also argued that to neglect race as incidental would be as grave as to make it fundamental issue. (10)

ホールが指摘するように、ジェームズは人種の問題を階級や政治の問題に従属するものだと見なし、帝国主義を人種の問題と混同するのは誤りだと考えてはいたが、かといって付随的な問題として無視するのも誤りであると考えていた。それゆえ、講演の性質や文章を発表する媒体に応じて、ジェームズは臨機応変に強調点を変更していたのだと考えられる。

それがもっとも明確に現れているのは、公民権運動の最盛期である1960年代後半に行われた諸講演だ。というのも、“black is beautiful”や“black power”といった、アイデンティティ・ポリティクスを象徴するスローガンに対して、ジェームズは一貫して批判的な立場をとっているからである。それでは、問題の本質を見逃してしまうのだとして。たとえば、1969年にデトロイトでおこなわれた講演“Black Studies and the Contemporary Student”は、次のように始まっている。

... for myself I don't believe that there is any such thing as Black Studies. There are studies in which black people and black history, so long neglected, can now get some of the attention that they deserve. But when you look at what is taking place under the guise of black studies in the United States today, you realize what a fundamental position ought to be... (James: 1969, 390)

“Black Studies”というフレーズをタイトルに持ち、黒人聴衆に向けられた講演を、「ブラック・スタディーズなどというものはない」と挑発的に

始めているわけだが、ここでは言及されるのみで詳述されずに終わっている「根本的な立場 *fundamental position*」とは、具体的にはどのようなものなのか。それを検討するために、まず同講演から同じくアイデンティティ・ポリティクスを批判している箇所を見てみる。

This is Lemmonier-Delafosse: “But what men those blacks are! How they fight and they die!” I am not boasting about black is beautiful. Please, I don’t go in for that. If other people want to, that’s their affair, if they say “Black is beautiful”, “Black is ugly”, black is whatever they like. I am concerned with historical facts. (James: 1969, 396–7)

かつて自著『ブラック・ジャコバン』にて引用した、ルモニエ・デラフォッスによるハイチ革命時の黒人兵への賞賛を指して、これは「黒人は美しい」などという問題ではないと述べ、さらに、黒人が美しいとか醜いとかには興味がないとまで述べている。1969年という、まさに公民権運動が最高潮の盛り上がりを見せ、“Black is beautiful” が効果的なスローガンとして用いられていた時期の発言である。

それでは、黒人という人種的アイデンティティより重要なものはなにかということ、「歴史上の事実 *historical facts*」だとジェームズは主張するのだ。この「歴史上の事実」の重視とは、具体的にどのような事実を指しているのだろうか。先に問題提起した「根本的立場」とあわせて究明してみたい。

この講演録の続きを読むと、ジェームズが重要視している歴史上の事象のひとつは、ハイチ革命や南北戦争時に共通して掲げられた「自由」という理念の追求だと考えられる。

It is practically the same thing that Lemmonier-Delafosse is stating about the ex-slaves in the French revolution. This is what happened in the Civil War. And, that is not because their skins are black, or any special bravery of blacks. It is that men who are fighting for freedom and to whom freedom is a reality fight much better. (James: 1969, 397)

つまり、「黒人」というアイデンティティが戦う勇気をもたらしたのではなく、自由という理念を持っていたから、黒人は戦士として優秀だったの

だというのだ。しかし、さらに重要な「歴史上の事実」とは、近代における人間社会が「奴隷制」を必要条件として持っていたということである。

Now if you agree that the first serious change in the fundamental features of human society came with the Industrial Revolution, if you agree ... that the wealth which went toward the building up of the bourgeoisie so that they could challenge the ancient regime came from the slave trade and slavery, then I wonder if you realize that to be doing black studies is to be able to get that into your head and then teach that to all the people who listen to you: that the vast change in human society came from the slave trade and slavery. (James: 1969, 396)

この引用に代表されるように、ジェームズの文章では“fundamental”という単語が、しばしば“human society”と組み合わされている。さらにこの引用では、近代の“human society”の起源に「奴隷貿易」と「奴隷制」があるのだと強調されるのである。

ここまでの議論の帰結として判明するのは、ジェームズにとって、「黒人」であるという人種的アイデンティティの問題と「奴隷制」という歴史上の事実は別物であるということだ。「奴隷制」は近代世界システムにおいて重要な問題ではあるが、それを人種問題と混同してはならない——これはカリブ出身で生涯を通じて地理的にどこにも定位しなかったジェームズならではの視点だ。なぜなら、奴隷制と人種問題の混同は米国特有の（そしてそれに追従する日本特有の）症状で、とりわけ1950年代以降の米国では、ソ連との関係からイデオロギー的に階級問題が排除され、エスニシティやジェンダーおよびセクシュアリティといったアイデンティティの問題へと置き換えられてきたからだ。それゆえ、ジェームズが示唆しているのは、奴隷制は必ずしも人種というアイデンティティの問題ではなく、人種の問題が奴隷制と分離主義に関係づけられ利用されたに過ぎないということなのである。そしてそれこそが、米国における黒人問題の重大なねじれだということである。

米国のヘゲモニー下にあると、そのイデオロギーを踏襲して、奴隷制を米国内の人種問題の中心に据えがちであるが、こと奴隷ということに関していえば、米国に移送された奴隷の割合は世界的に見るとわずかなもので



ある。16世紀から19世紀までにアフリカから移送された奴隷の割合をみると、カリブが42%（推計420万）、ブラジルが38%を占めている。それに対し、米国に移送された奴隷の割合はたった4%に過ぎない<sup>3)</sup>。にもかかわらず、奴隷制の人種問題への置き換えが、米国のヘゲモニーに左右されて普遍化される。それゆえジェームズは次のようにいっているのだ。

Now talk to me about black studies as if it's something that concerned black people is an utter denial. This is the history of Western Civilization. I can't see it otherwise. This is the history that black people and white people and all serious students of modern history and the history of the world have to know. To say it's some kind of ethnic problem is a lot of nonsense. (James: 1969, 397)

「ブラック・スタディーズをエスニックの問題だなどというのは、まったくナンセンスだ」とジェームズがいうとき、ジェームズは米国よりも大きな枠組みの近代史への注意を促しているのである。それ抜きには人種やエスニックの問題は考えられないのだと。

### ジェームズのポピュラー・カルチャー論

アイデンティティ・ポリティクスのアリバイとしてのエスニシティを超え、切断し、新たな連帯を示唆するメディアとして、ジェームズはポピュラー・カルチャーの持つ可能性に期待を寄せていた。ジェームズ自身は“popular arts”という言葉を用いて、映画、音楽、大衆小説、ラジオなどを総合的に指し示しているのだが、現在のカタカナ用法において「ポピュラー・アート」という語はおもに美術の領域に限定して使用される傾向があるので、以下の論考ではジェームズが“popular arts”という語を用いている箇所でも「ポピュラー・カルチャー」と表記する。

ジェームズは1938年に米国に入国するやいなや、米国社会と米国文学の研究に没頭し、独立戦争や南北戦争がヨーロッパの諸階級に及ぼした影響などを学ぶにつれ、第2次世界大戦後の米国国民が新たな歴史のエージェントになるという確信を深めていった。そうした考察の帰結が、1949年から50年頃に書き上げられたといわれる“Notes on American Civilization”

という草稿である。その段階では結局出版されることがなかったのだが、ジェームズの没後4年たった1993年に *American Civilization* というタイトルで出版されることになる。同書の構成は遺稿のそれを守っており、まず前半ではじめに1776年から1876年の米国の個人主義について、続いて19世紀の米国知識人について、さらに1876年から1919年の新個人主義について考察され、最終的に執筆時現在(1949年)の「自由」について考察が加えられている。後半では、その現在から見た米国社会の展望として、「国民が求めるべき幸福」および「黒人、女性、知識人」に関する問題が論じられている。前・後半ともに米国社会を経済的、歴史的にとらえた政治色の強い論考になっているが、それらの間に50ページ近い紙幅を与えられて置かれ、ブリッジとしての役割を果たしているのが“*Popular Arts and Modern Society*”というポピュラー・カルチャーを論じた章だ。つまりジェームズは、歴史の新たなエージェントたる米国の特徴的な現象として、さらにいうなら過去から未来への橋渡しとしてポピュラー・カルチャーを扱っており、そこにはスポーツ・ライティングにつながる「運動する身体」への視点が含まれているのである。

ポピュラー・カルチャーはしばしばマス・カルチャーとして、すなわち大衆が無自覚に受動的に享受する娯楽だとして、否定的に扱われてきた。リチャード・シュスタマン (Richard Shusterman) は、「ポピュラー・カルチャーが美学者や文化理論家にとってポピュラーだったことは一度もなかった」だけでなく、それが左右両翼の論陣からそろって批判されてきた希有の例だと述べている。

it [the denigration of popular art or mass culture] is widely endorsed by intellectuals of violently different socio-political views and agendas. Indeed, it provides a rare instance where right-wing reactionaries and Marxian radicals join hands and make common cause. (169)

ことほどさように軽蔑されているポピュラー・カルチャーについて、ジェームズはどのような点を評価しているのか。まず前提として、ジェームズのポピュラー・カルチャー論は、高級文化に対する対立項としてポピュラー・カルチャーを置いてはいない点が特徴的だ。高級文化への反拮定としてではなく、19世紀的価値観からの脱却という側面からジェーム

ズはポピュラー・カルチャーを評価しているのである。それゆえ彼は、ポピュラー・カルチャーがプルースト、ピカソ、ジョイス、ストラビンスキーのみならず、ベルクソンやフロイトに並ぶと論じることになる。

These new popular arts seemed very far removed from the work of the great artists in Europe. Yet I believe there is a bond and one whose significance will grow with time. Proust, Picasso, Joyce, Stravinsky, T. S. Eliot (and also Bergson and Freud) are united in this, that they seem to have had as their common purpose the complete destruction of the values of 19th century civilization. (James: 1954, 249)

19世紀的価値からの脱却としてのポピュラー・カルチャーの特徴について、ジェームズは大きく分けて3点を指摘している。第1点は、観客（聴衆）の創造過程への参与である。大衆としての観客（mass audience）が工業都市に登場したことと大企業の誕生に同等の意義を見だし、G. W. グリフィス（Griffith）やチャップリンの作品が典型的な近代企業によって制作された点を指摘したうえで“the artists, the medium and the audience, were an organic part of their day.” (James: 1954, 249) とジェームズは述べるのである。さらに、映画監督が常に観客とシーンとの関わり合いを念頭にカメラワークを決定する点を指摘したうえで、“Never before has the audience been so directly a constituent of the process of artistic creation.” (James: 1954, 251) と論じている。

19世紀的価値からの脱却としてのポピュラー・カルチャーの特徴としてジェームズが挙げる第2点目は、“It [the mass popular audience] was one of the greatest audiences that an artist ever had. First, it was a national audience composed of all classes.” (James: 1954, 249-50) と述べられているように、階級横断的な聴衆の存在である。第1点目と第2点目は重複しているとも見なすことも可能だし、実際こうした観点は、20世紀初頭に映画の可能性を見たヴァルター・ペンヤミンを含む現代のポピュラー・カルチャー研究にも広く共有されている。たとえば、シュスタマンは、「エスニシティやイデオロギーなどなどの面において多くの層からなる観客・聴衆（multitudinous audience）を一枚岩的な塊としての観客・聴衆（mass audience）と混同するのは誤りであり、ポピュラー・カルチャーを非難す

る批評家たちが見逃していることだが、観客は様々な社会的・教育的背景とイデオロギーを背景として、それぞれ異なる解釈の戦術を用いているのだ」と述べ、ラップ・ミュージックを具体例として挙げながら次のように続けている。

The record scratching, black English, sexually explicit content, and anti-American anger of many hit rap songs are not at all “obvious and approved” for the vast majority of “middle America,” but this does not prevent such songs from achieving immense popularity. Indeed, their popularity derives precisely from the distinctive ethnic and ideological focus and their challenge of accepted public standards, from being a “Public Enemy” as the popularly celebrated but publicly denounced rap crew shrewdly named itself. (Shusterman 190-1)

ラップ・ミュージックの人気は特定の人種的イデオロギー的背景から始まったものの、結果的にそうした背景の特殊性を超える人気を博したのだとするシュスタマンの指摘は、階級を超えるものとしてのポピュラー・カルチャーというジェームズの論を思い起こさせる。

19世紀的価値からの脱却としてのポピュラー・カルチャーの特徴としてジェームズが挙げる第3点目は単純化を経て示される複層性という特徴である。まずジェームズは、当時人気を博していたコメディの原始的(primitive)で単純(elemental)な性質を称える。

In their crude mercurial manner, but having a new medium to play with and very sensitive to their audience ... the early makers of these comedies simplified the medium—they went for the viscera. In the multitudinous confusions, collisions, accidents, pie-throwing, etc. in which they worked, they aimed not at wit but at finding the most primitive, elemental source of humor and human discomfiture. (James: 1993, 132-3)

ここで用いられている奇妙な表現「はらわたに効く they went for the viscera」は、別な箇所でもロシア映画について用いられている。

The Russian film directors of their great period achieved their effects by simplifying their symbols, the elements of the medium. They went for the viscera, and their greatest scenes tore at the insides of intellectuals and peasants alike. (James: 1993, 141)

これは、ジル・ドゥルーズ (Gilles Deleuze) が指摘した「肉に属する神経系に直接働きかける形体」と似通った発想であり<sup>4)</sup>、「物語化」を乗り越える表現のひとつとして「身体性」を前景化していると思えることもできる。その証拠に、ジェームズが「単純化を経て示される複層性」という命題を論じるに当たっては、以下のように、チャップリンのパントマイム (身体性) とジークムント・フロイト (Sigmund Freud) の精神分析学が接続されているのである。

It [Chaplin's method] can be explained by a series of examples. To begin with Freud. His psychology is a reduction of the complicated personality of modern man to a primitive elemental urge and two checks upon it. All men are psychologically reduced to the simplest of common denominators. From this immense simplification can be raised structures infinitely more complicated than in the old psychology. (James: 1993, 141)

すなわち、チャップリンの単純化された身体的様式はフロイトの精神分析学と同じで、とてつもない単純化を経てはじめて果てしなく複雑な構造を浮かび上がらせるのだと。

身体性が持つこの「単純化を経て示される複層性」を意識すれば、すでにみてきたジェームズの歴史および人種へのアプローチに関する問題が、彼のポピュラー・カルチャー擁護と地続きであることがわかる。ジェームズが人種を歴史の付随的な問題だとしたのは、奴隷制を世界の歴史という単純化した構造の中でとらえることが優先的であり、複雑なエスニシティを出発点にするのはあべこべであると考えているからだったのだ。

米国の人種問題に対するジェームズの姿勢は、このようにポピュラー・カルチャーを梃子にすることで、より明確な輪郭が見えてくる。最初の15年間の米国滞在期間 (1938-1953) は、第2次世界大戦から東西冷戦に至る時期に相当し、まさしく米国が共産主義的なものを極端に排除し始め

た転換期を含んでいる。加えていうなら、ポピュラー・カルチャーを代表する存在であったチャップリンがバッシングを受け始め<sup>5)</sup>、「容共的」とみなされて赤狩りの対象となり国外追放になった年(1952)を含む時期に相当するのである。そうした時期を経て、米国では徐々に物質的・階級的問題が人種やエスニシティといったアイデンティティの問題に置き換えられてゆく。人種問題は階級や政治の問題に従属しており、帝国主義を人種問題と混同するのは誤りだとしながらも、いっぽうで人種問題を付随的な問題として無視するのも誤りだとするジェームズのアンビバレントな姿勢は、このような時代背景に起因しているものであり、その結節点に「身体」という問題系が発生しているのだといえる。

## 結び

ジェームズの米国時代の論考を中心に、彼の人種問題へのアプローチをポピュラー・カルチャーの擁護という観点から解釈し、その結節点に「身体」があることを指摘してきたが、人種やエスニシティを超えた連帯については、米国に入国する直前の1938年にハイチ革命史として出版した『ブラック・ジャコバン』の補遺のなかに、すでにその発想の萌芽が見てとられる。というのも、ジェームズはカリブ出身の同胞エメ・セゼール(Aimé Césaire)による『帰郷ノート』からの一節で閉じられる文章で、「いかなる人種にも、美・知・力を独占する権利はない」といっているのだから。

The work of man is not finished. Therefore the future of the African is not to continue not discovering anything. The monopoly of beauty, of intelligence, of force, is possessed by no race, certainly not by those who possess Negritude. Negritude is what one race brings to the common rendezvous where all will strive for the new world of the poet's vision... it would be the most vulgar racism not to see here a poetic incarnation of Marx's famous sentence, 'The real history of humanity will begin.' (James: 2001, 313-4)

続いてジェームズはさらなる対位法を見せ、ネグリチュードの詩人セゼールをアングロ・サクソンの詩人 T. S. エリオット (Eliot) と並べる。

It is the Anglo-Saxon poet who has seen for the world in general what the West Indian has seen concretely for Africa.

Here the impossible union  
Of spheres of existence is actual  
Here the past and future  
Are conquered, and reconciled,  
Where action were otherwise movement  
Of that which is only moved  
And has in it no source of movement—  
(James: 2001, 314)

セゼールからいきなりエリオットの“Dry Salvages”へと、つまり全く異なる天体・領域 (sphere) に属する詩へ移行することで、ジェームズは一系列の歴史のみをありがたがる偏狭な地域主義や“black is beautiful”を含む人種主義から離れ、他者の複数の歴史を受け入れることへと向かう。そこにおいて、すべての歴史が「不可能な結合 impossible union」によって活性化され、「不可能な結合」を実現するのである。『境界を越えて』におけるスポーツ・ライティングは、このような（不可能な）結合点を指し示すものであり、「身体」という人種と歴史と階級の結節点における思考の（不可能性を指し示すものでもある。

※本論文は科学研究費補助金（基盤研究(C)）課題番号17K02550「C. L. R. ジェームズの地理的移動と身体文化論との関連性およびその影響」による研究成果を含んでいる。

## 註

- 1) 日本国内では、1990年代までジェームズ著の翻訳は『世界革命1917～1936』（翻訳出版年1971）と『ブラック・ジャコバン』（同1991）の2冊のみだった。2014年にジェームズの著作ではないが、関連文献としては20年以上ぶりに『革命の芸術家——C. L. R. ジェームズの肖像』が出版され、翌2015年には『境界を越えて』の翻訳が出版され、あらたに注目される兆しが見え始めてはいる。

- 2) ジェームズの生涯については Anna Grimshaw, *C. L. R. James Reader* (Oxford UK & Cambridge USA: Blackwell, 1992) および Paget Henry and Paul Buhle (ed), *C. L. R. James's Caribbean*. (Durha: Duke UP, 1992) を参照。
- 3) 加茂 pp. 33-4参照。
- 4) ドゥルーズ p. 33参照。
- 5) 1936年の『モダンタイムズ』ですでに労働運動への共感を示し批判を受けるようになったが、第2次世界大戦後1947年の『殺人狂時代』によって「共産主義寄り」という批判が一気に高まった。

### 参考文献

- 邦訳書がある場合には引用等で邦訳書を利用したが、訳語は文脈に応じて変更している場合がある。引用頁数は原書の頁数による。
- Aberjhani and Sandra L. West. (2003) *Encyclopedia of the Harlem Renaissance*. New York: Checkmark Books.
- Hall, Stuart. (1992) “C. L. R. James: A Portrait”. Ed. Paget Henry and Paul Buhle (1992) *C. L. R. James's Caribbean*. Durham: Duke UP. 4-16.
- James, C. L. R. (2001) [1938] *Black Jacobin: Toussaint L'Ouverture and the San Domingo Revolution*. London: Penguin. 青木芳夫(監訳)『ブラック・ジャコバン トゥサン＝ルヴェルチュールとハイチ革命』大村書店、1991年。
- (1954) “Popular Art and the Cultural Tradition”. Ed. Anna Grisham (1992) *C. L. R. James Reader*. Oxford UK & Cambridge USA: Blackwell. 247-260.
- (1969) “Black Studies and the Contemporary Student”. Ed. Anna Grisham (1992) *C. L. R. James Reader*. Oxford UK & Cambridge USA: Blackwell. 390-404.
- (1993) *American Civilization*. Ed. Anna Grimshaw and Keith Hart. Cambridge MA & Oxford UK: Blackwell.
- (1993) [1963] *Beyond a Boundary*. Durham: Duke UP. 本橋哲也(訳)『境界を越えて』月曜社、2015年。
- Phillips, Caryl. (2002) *New World Order*. New York: Vintage. Kindle digital file. 上野直子(訳)『新しい世界のかたち 黒人文化とディアスポラの世界地図』明石書店、2007年。
- Said, Edward. (1993) *Culture and Imperialism*. New York: Vintage. 大橋洋一(訳)『文化と帝国主義 2』みすず書房、2001年。
- Shusterman, Richard. (2000) *Pragmatist Aesthetics: Living Beauty, Rethinking Art*, Second Edition. Lanham: Rowan & Littlefield Publishes.
- 加茂雄三『地中海からカリブ海へ これからの世界史 6』平凡社、1996年。



C. L. R. ジェームズによるアメリカの身体論

ドゥルーズ、ジル（著）、山縣熙（訳）『感覚の論理 画家フランシス・ベーコン論』法政大学出版局、2004年。

## C. L. R. James's Perspective on Body Culture in America

Katsunori KAJIHARA

C. L. R. James's *Beyond a Boundary* is not only regarded as a beginning of sports writing but also has influenced the whole body of so-called cultural studies. However, despite the fact that the book is about a sport, cricket, few arguments has been addressed to it from the viewpoint of body culture or his cultural theory discussed in the US. So, the paper attempts to locate his arguments about popular culture written during his stay in the US in relation to his emphasis on body culture including sports.

According to Caryl Phillips, in a later passage James reflects upon being denied admission on racial grounds to the local English regiment, but claims that this incident left him unscarred. In addition, as Stuart Hall points out, James felt that questions of race were subsidiary to questions of class and politics and that to think of imperialism in terms of race is disastrous. But he also argues that to neglect race as incidental would be as grave as to make it fundamental issue. This ambivalent position leads to his unique approach to the body; while verifying the racial or ethnic viewpoints with the problematics of history and class, he does not privilege the body itself nor racialize or make it ethnic. For, if we realize the multiple layers of body expressed through simple structure, we will understand James's approach towards the problematics of history is contiguous to his vindication of popular culture including body culture.